

「筑波大学附属図書館所蔵 日本美術の名品」 展が終わって

守屋正彦
芸術学系助教授

4月21日、筑波大学附属図書館において狩野探幽の屏風絵が発見されたニュースは全国紙ばかりか共同通信を配して地方紙にいたる各地の新聞紙面に掲載された。この屏風絵を公開した展覧会は5月22日（月）から6月9日（金）まで20日間の会期で開催され、短期間にしては4300人と公立美術館並みの破格の入館者を迎え、大好評のうちに終了したのであった。学外からの入館者は地域や首都圏、近畿圏ばかりか遠く北海道から九州に至る各地から1500余名に達し、その反響が大きなものであったことが窺われる。

この展覧会、大学本部の大きな愛に支えられたことは言うまでもないが、図書館職員全員の、意気に感じた隠れた労力があつたればこそそのことであつた。準備から会期終了まで、主催者側として芸術学系から参加した私は、図書館事業の中での展覧会開催はきわめて大変であると思ひ知つたのである。

展覧会は貴重書室だけでは収まらず、古典資料閲覧室を展示室に改修し、新館の地下に至る階段から廊下から全体が展覧会場として機能する空間となった。また会期中は特設の受付を図書館の入り口に設け、休館日なく公開を行い、これに加えて鑑定依頼やアクセス、利用の案内などさまざまな問い合わせ、展示室でのギャラリートークなどにも対応したのである。通常業務から考えると、本当は、いつもどおりの貴重書展示室で行う特別展だけで手一杯、それに比較すると本展はその機能を遙かに超え、逸脱した掟破り。従来の秩序を壊して、仮の職務体制を打ち立てたのである。だから冒頭の数字、図書館の方の熱意の賜物なのである。

探幽の屏風

日本美術史を学ぶ私にとって、今回の屏風絵の展観はまたとない実物授業の機会であつた。特に新出の探幽、尚信の屏

風は江戸初期の狩野派の傑作として、これからの美術書で紹介されるべき作例である。展覧会では探幽の屏風は貴重書展示室の広い壁面に対する二つの屏風が身を寄せ合うようにして、壁いっぱいに表示されていた。特設のステージに据えられた屏風は当初見つかった状態とは打って変わって晴れがましかつたが、装いは当初の状態のままクリーニングしただけであった。ただきちんとライティングを施すとももの見事に作品のよさが滲み出たのである。

実際に探幽の絵が最も映える展示は六曲屏風を折り曲げず、平たく伸ばすのが効果的であったが、一対（一対）となると、横幅が7メートルを大きく超え、展示室の壁面では物理的に無理であった。しかし折り曲げても、対で展示した探幽画の計算された表現は芸術の学生に彼の魅力を伝えることができたのである。

私は会期中に授業を図書館で行った。

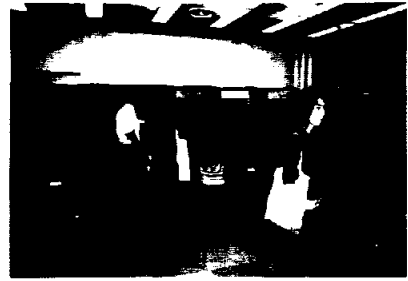


狩野探幽の屏風の前で
(図書館員によるギャラリートーク)

「芸能人は歯が命」というコマーシャルがあったが、美術史の学問においては「絵が命」、一次資料は美術作品がテキストであることは言うまでもなく、その絵をどう解釈するかは実物で解説するに限る。実物は図版と異なり、画家の筆の息遣いさえも伝える。とくに狩野派のように中世の水墨の画技を伝える画風は墨の濃淡、筆勢、余白を見、全体に漂う時代の気分、画家の筆意をゆりり鑑賞したい。熱心な学生は探幽画の魅力を十分に理解したようである。

探幽の時代

探幽は江戸の狩野派の最初の人。彼の先代までは京都に住み、パトロンは足利将軍、そして織田信長、豊臣秀吉。歴史が変わる転換期に十代の探幽が徳川家康と出会わなかったなら、狩野派は、のちに江戸時代を通じて、最高の、また盤石の御用絵師



狩野尚信、田村直翁の屏風
(芸術研究科生の鑑賞)

としての地位を築いてはなかった。そして、探幽は江戸狩野の新しい様式を示した人である。「様式の父」という言葉があるが、彼はまさにそれであった。後進は彼のスタイルを学んだのである。そして新出屏風は探幽様式の典型なのである。

ところで学園都市が拓かれた頃を考えると、江戸の最初もこのようであったことに思いを馳せることができる。山稜整備ということばがその様子を言い当てていると考えるのだが、江戸の最初は上野のお山に寛永寺や東照宮、そして林羅山の忍岡聖堂など、パソコンの入力に喩えれば、新しい文化を書込める場が存分に在ったのである。

ここで私がなにを申し上げたいかというと、政治家である徳川家康の周辺に仏教では天海僧正、儒教（朱子学）で林羅山、お茶では小堀遠州、そして画家に狩野探幽がおり、江戸の文化は彼等によってその基礎が築かれた。江戸バージョンの最初の書込みが行われたのである。特に探幽は彼等全てに関係し、江戸文化の荘厳に大きな役割を果たしたのであった。

例えば天海僧正と探幽について、その主たる事績を拾うと、家康を中心に展開した大御所文化に見ることができる。東の天台宗の拠点をも西の比叡山に倣い、東叡山寛永寺とし、その造営を進めたのが

天海僧正であった。彼は家康を「東照大権現」とし、神格化を果たし、日光に東照宮を開いた人である。これに関係して探幽は「東照宮縁起絵巻」を描き、また現存19幅に及ぶ「東照大権現像」を制作。天海の肖像はもちろんのことであった。

江戸文化の読み直し

新出の探幽屏風は絢爛豪華と言うよりは淡白な画風である。江戸も最初の頃は探幽も京都の二条城の荘厳など桃山時代の豪壮な気分が充溢していたが、江戸の治世が安定するに従い理知的で瀟洒な傾向を求めるようになっていった。このような時代気分はとくに孫である三代家光の時代に完成していく。

これまで美術史では淡白な表現への変化について、桃山時代の外向的な性格から、それを内に改めるような傾向が幕藩体制下にあったためと解釈している。しかし、そのような気分が支配的であったと見なしながらも、具体的には表現がそのように変化した結果からの類推であり、それより解答を得たに過ぎなかったのである。わたしはこの新出屏風を前にして、美術に現れた結果から時代の傾向を見据えるのではなく、その背景たる、将軍を中心に天海僧正や林羅山らが、江戸初期の体制、思想、文化を入力しだしたこと

を十分解釈する必要を感じたのである。

時代が転換し、江戸文化の最初を入力する。その入力した種子は江戸時代に成長したり、枯れたり、さまざまな展開を示す。その種子時代、儒教を採用したことが幕藩体制下、武士の思想形成に大きく影響したといわれている。そのプロパガンダにも狩野派が関与していたのである。

歴世大儒像の展示に思う

林羅山は忍岡聖堂に孔子及び彼の俊足（四配）の彫像を奉祀するにあたり、歴世大儒像21幅を狩野山雪に依頼した。筑波大学の6幅は中でも祭典の折に3幅づつ左右両壁にかけられた肖像である。探幽も孔子像や聖賢図を描いている。

ところで肖像画と言っても彼等は聖賢子を見たわけではない。版本を典拠に実在するが如く迫真の写実で描いたのである。そのようにしなければならなかったのは儒教テキストのビジュアル化であり、それが聖像としての神格を示したからにはほかならない。

探幽は羅山没後に彼の肖像を描いている。

思うに彼は徳川家康の神格や儒教の普及など空間を障壁画や襖絵、屏風絵で荘厳する単なる絵師ではなく、彼等とともにその宗教や思想をビジュアルにプロパガンダす

る役割を負っていたことが明らかである。

展覧会で私はこれまでの美術史の解釈をさらに進める必要を痛切に感じたのである。江戸文化の読み直しは、人文諸学がともに語らう場を作らなければ、一領域では解釈に限界もあるうし、本学こそ、それが用意できる環境ではないだろうか。

聖賢図と十哲の木主、そして再び新出屏風に思うこと

大学コレクションは新出屏風も含め、どういうわけか江戸初期に集中している。このうち展覧会では先に挙げた歴世大儒像のほかに、聖賢図の画稿3面を展示した。往時の扁額は失われたが6面あった。聖堂の内陣に掛けられたもので、写しが筑波大学に14面伝えられている。1面が2メートルほどあるから全て飾るならば相当広い空間が必要である。このほかに十哲の木主（木彫像）が本学にあったようであるから、今でも大学のどこかに伝えられていれば、かつての聖堂を再現した展覧会ができそうである。湯島聖堂の余香は今、本学に伝えられているのである。

ところで聖賢図の扁額16面は実は2度制作されている。最初は元禄元（1688）年に探幽の子益信が描き、これが焼失して、二度目は宝永元（1704）年に尚信の子常信が描いたのである。

これに妙に符合するが、探幽、尚信が描いた二つの新出屏風は表具の装丁から同じ所蔵に繋るものであることが明らかであり、その子らが聖賢図を担当したのである。さて会期を前にご教示頂いたことであるが、尚信屏風は主題が道教的色彩が強いとのこと。聖堂に関する資料とは考え難いところであるが、ただ画題そのものは狩野元信の画中人物に儒教的傾向が窺える霊雲院の「雪中山水図」襖絵からの引用と考えられる。また江戸の儒教はこれを厳格に排他としたかは明らかでない。新出屏風の経歴を調査することは、わが国近世文化の解釈に極めて重要な意味を持つ。貴重な学術資料であり、学際的な研究、碩学のご示教を賜りたいのである。

天平の書

展覧会の会期中、美術史学会全国大会が大学を会場として開催された。このように書くと他人事のようにであるが、実際には学会所属の教官として、ホスト役をこれ務めたのである。学会は全国の大学教官、研究者や美術館の学芸員らが一堂に会す。そのうち二百余名が展覧会を見学した。彼等は新出の屏風絵も鑑賞したが、本学に石山寺一切経中の優れた経巻の一つ、大智度論が展示してあることに驚いたようである。国文学の資料として

も極めて重要であることは学長が開会の辞において強調されていたが、今回は書の美の名品として展示したのであった。

反響

見学が終って、筑波大学がこのような古典資料を持っていたことに感銘したと出席者から言っていた。折には、企画してよかったと嬉しくなった。さきの経巻、実は芸術専門学群長の角井先生が鉄鍔片手にケースの中に入り展示した賜物である。

新しい大学である筑波大学に古典的な美術の名品があることは、私にとっては職業柄とても嬉しいことであった。美術はそれぞれの時代の気分を反映し、優れた感性の痕跡である。それを大学が変わろうが伝えぬいたことは、その資料の持つ歴史的意味を理解し、また人間ならではの造形的な感性を尊重し伝えたからにはほかならない。このことで私が最も嬉しかったのは若き感性が熱心に見入り、素直に喜んでくれたことであり、「宝です」と言ってくれたことであった。

展覧会は修復を待たずに公開された。孫にも衣装、修復後に煌びやかな姿を晴れがましいステージでもう一度見たいものである。

(もりやまさひこ 日本絵画史)